

大病院が集中する札幌には高度な医療を求めて地方から入院してくる患者が多い。付き添いの家族は近くのホテルに連泊したり、アパートを新たに借りたりと多額の出費を強いられてきた。こうした負担を減らそうと、札幌のアパート経営者の協力を得て、空き室を安く提供する取り組みが始まっている。

美瑛市で農業を営む安達玲子さん(43)は昨年6月から5カ月間、北大病院に入院する次男の付き添いのため、札幌に滞在した。01年に続き、2度目の入院。前回は病院の近くでアパートを借りた。入院期間も前回も5カ月だったが、短期間での解約はできず、10カ月分の家賃を払った。敷金や礼金も家計に響いた。

今回は病院の看護師の紹介で、地方から札幌に来た付き添い家族に宿泊施設を提供する任意団体、北海道ファミリーハウス(理事長 松本脩三・北大名誉教授)を通じて滞在先を探した。病院まで自車で10分のところにワンルームのアパートが見つかった。

料金は光熱費込みで1日約2千円。安達さんは「出費が減っただけでなく、大家族が時々声をかけてく

北海道ファミリーハウス 患者に付き添う家族支援

「**れて精神的にも助かった」と話す。**

安達さんに部屋を提供した札幌市東区のアパート経営、田辺恭子さん(61)は、入院した義母の付き添いと仕事との両立に苦労した経験がある。「疲れとストレスで体に癒瘍が出てしま

周りに新築マンションが林立し、入居者は減った。「空き部屋を遊ばせておくくらいなら」と01年から3部屋のうち2部屋をファミリーハウスに登録している。地方から出てきて、すぐに生活が定まるようにと各部屋に冷蔵庫や電子レンジ、食器などを自費でそろえた。「収支はトントン。でも役に立てれば、それで十分です」と田辺さんは言う。

北海道ファミリーハウスは00年11月に札幌に事務所を開いた。市内の21のアパートと3つのホテルの協力のもと、最大100部屋の付添いの家族に提供している。宿泊費は季節や各アパートによって異なるが、1泊2500円以下になるよう取り決めていた。

ハウスの事務局長で北海道電力職員の金田耕二さん(48)は労働組合の元書記長。企業や労組の社会貢献のあり方を学ぼうと98年秋、社員向けの勉強会に北

海外や国内の他地域では、ハウス専用の施設を造るのが一般的だが、建設費がかさみ、提供できる数は限られる。札幌に次々と建てられるアパートやマンションを見て、大家さんに空き部屋を安く貸し出してもらう方法を思いついた。

アパート空き室、割安で提供



付き添いの家族に貸し出す部屋の換気をする田辺さん＝札幌市東区北15条6で

北海道ファミリーハウスの運営は寄付に支えられている。金田さんを始め、多くの北電社員が年間千円の寄付をしている。

ハウスを通じてアパートやホテルを利用する付き添い家族は年800人ほど。金田さんは「広い北海道で大きな病院を各地に造るのは財政的に難しい。札幌で治療を受けたいと思いがら、二重生活の費用に頭を痛めている人を少しでも減らしたい」と話している。

(報道部・土屋亮)

わたしの
札幌プロジェクト